

## 住居の構造安全性に関する意識調査

### —その1 心理学的手法による意識抽出のための基礎調査—

尚絢女学院短大 ○平田京子 日本女大家政 石川孝重

**目的** 建築構造技術の発達した今日、住まい手は災害に遭遇しない限り、家屋の構造的な安全やその保証方法に対する意識は漠然としているのが実状である。日常いただいている安全意識にこうした傾向が強いことは、我々が行った予備調査においても明らかである。が、新しい構造設計法である限界状態設計法では、住まい手の安全に対する意識も安全性決定の重要な要素と考えられる。したがって、住まい手の構造安全意識の現状を把握し、経済性とも関連する住居の安全性能の要求水準を解明する必要がある。しかし、個人のあいまいな意識構成を要因ごとに分離し、信頼度の高いデータとして抽出できる方法は、既往の研究では認められない。そこで本研究では心理学的手法を用いたアンケート調査を行い、個人の意識構成の特徴さらには全体傾向を明らかにする。

**方法** 本報告では心理学的手法に基づくアンケートを作成し、その信頼度を高めるために行った90名の女子大学生に対する基礎調査結果を報告する。作成に先立ち、構造安全意識を構成する各因子(尺度)を抽出した。アンケートは性格検査に準じた3件法の回答形式とし、各尺度について数問ずつ設問した。設問順序は回答を歪めないよう配慮した。

**結果** 多変量解析等により各自の回答を分析した上で、心理学的手法に基づく信頼度分析等を行い、質問の再編成を行うことで信頼度を高めた。また、各回答の単純集計からは、災害経験の有無、恐い災害の順位、構造に関連する知識の保有状況、現在の構造レベルの把握状況などが分かった。また安全であればいいというだけでなく、種々の使用限界(不快振動、たわみ、ひびわれ等)に関しても、質を要求する回答の多いことが特徴的である。